

Title	Haben Sie auch nichts vergessen? : 決定疑問文に用いられる心懸詞auch
Sub Title	Modalpartikel "auch" in der Entscheidungsfrage
Author	岩崎, 英二郎(Iwasaki, Eijiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.46 (2010.) ,p.1- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20100331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Haben Sie auch nichts vergessen?

——決定疑問文に用いられる心態詞 auch ——

岩崎 英二郎

今からもう40年も前のことになるが、小野寺和夫さんとの共著で『ドイツ語不変化詞辞典』を出版したとき（1969年）、当時の同僚でいまは亡き西義之さんが、全体としては好意的な、しかしいかにも彼らしい辛口の書評をしてくれたことがある¹⁾。その書評のなかに、「はじめてドイツへ行ったとき、ある日本学者とバスに乗っていると、彼はドイツ語が日本語にまさるとも劣らぬ微妙さをもっていることを力説し、たとえば——と言って、ベルリンのバスの出口に書いてある掲示を指した。Haben Sie auch nichts vergessen? 「この auch は日本人にはわかりますまい」と言った。幸い私のカードにこの auch は出ていたので、私は急場(?)を切り抜けた覚えがある」云々という一節があった。これはバスから降りようとする乗客に対して、降車のさいに荷物を置き忘れたりしないようにとの注意書きであろうが、当時はまだこの種の auch に対する語感がまるでなかった私は、「何これ?」という感じで読み過ごしてしまい、偶々この書評が出たころには私自身が別の大学に移っていたこともあって、西さんに尋ねる機会を逸したまま今日に至った。しかし今回その書評を改めて読み直してみると、この auch は心態詞の研究が進んだ現在ではごく一般的に知られている用法の一つにすぎぬことに気づいたので、ドイツにおける心態詞研究がまだ緒に就いたばかりの1960年代に auch のこの用法をすでに知っ

1) 〈書評〉岩崎英二郎・小野寺和夫共編『ドイツ語不変化辞典』、「ドイツ語学文学論文集」第18巻第1号、1970

ておられた泉下の西さんに敬意を表する意味をもちかねて、改めてこの用法について論じてみたいと思う。ついでに言えば、私自身はこの種の *auch* を〈確認を求める *auch*〉と呼ぶことにしている。

1980年代に相次いで出版された Harald Weydt と彼の弟子たちとの共著 „Kleine deutsche Partikellehre“⁽²⁾ と Gerhard Helbig の „Lexikon deutscher Partikeln“⁽³⁾ とは、その趣旨と内容はそれぞれ異なるものの、私たち外国人がドイツ語の心態詞のニュアンスを理解する手がかりとしては、いまだに大いに役立つ好著であるが、両書はともに上記の *auch* の用法を扱っている。Weydt によれば、*auch* in Entscheidungsfragen drückt eine gewisse Besorgnis aus. Der Sprecher hofft, daß die Antwort *ja* (bei verneinten Fragen: *nein*) sein wird. Häufig werden solche Fragen von Müttern an ihre kleinen Kinder gerichtet. とあるから、そこに挙げられている Hast du *auch* die Hände gewaschen? (手はちゃんと洗ったの?) を例にとれば、かりに母親が子供にむかってそう言ったとすれば、もしかしたら子供はまだ手を洗っていないのではないか、といういささかの心配とともに、子供に「うん、洗ったよ」と答えてもらいたい期待の念が、この心態詞 *auch* によって表されているということになる。Helbig のほうの説明はもうすこし複雑で、Nicht notwendig reaktiv, aber an interaktiven Kontext (Handlungskontext) gebunden; indiziert Zweifel, Vergewisserung oder Besorgnis, macht Frage zur „Vergewisserungsfrage“: Der Sprecher hofft, daß der in der Frage bezeichnete Sachverhalt zutrifft, hält es aber nicht für sicher, möchte sich vergewissern und suggeriert dem Hörer, daß der Sachverhalt so zu sein habe, daß mit *ja* geantwortet wird, erwartet also mit der suggestiven Frage eine bestätigende Antwort, drückt mit dieser Sprechereinstellung zugleich

2) Harald Weydt / Theo Harden / Elke Hentschel / Dietmar Rösler: Kleine deutsche Partikellehre. Ein Lehr- und Übungsbuch für Deutsch als Fremdsprache, Stuttgart 1983.

3) Gerhard Helbig: Lexikon deutscher Partikeln, Leipzig 1988.

eine Aufforderung (das Erfragte zu tun), zuweilen Ermahnung bzw. Vorwurf aus (= *Ich habe Zweifel, ob...; Ich hoffe, daß...; Warum tust du ... nicht?*) となつてはいるが、内容的には Weydt の場合と大差はなく、上の例を使えば (この例文は Helbig の本にも挙げられている)、「手を洗わなければいけないよ」という子供に対する要求や、「なぜ手を洗わなかったの?」という非難の響きもさらに加わり得るという説明である。

もともと auch には「…も」という日本語の助詞と同じように、他との共通点や類似点を示したり、追加を示したりするはたらきがある。Ich habe Hunger. Ich habe *auch* Durst. (腹が減ったな。のども乾いたし)、*Auch* du, mein Sohn Brutus! (ブルータス、おまえもか)、Ich ging zu ihm, weil ich viel mit ihm zu besprechen hatte. *auch* wollte ich seine Frau nach langer Zeit wiedersehen. (私が彼のところへ行つたのは、彼と打ち合わせをすることがたくさんあったからだ。それに久しぶりに彼の奥さんに会いたくもあったし)などの例を見れば、それは明らかだろう。Ich glaube, er ist krank. – Er ist es *auch*. (彼は病気だと思ふ—事実そうなのさ)にしても、「事実病気なのさ」との答えを「事実病気でもあるんだ」と言い直してみれば納得できるはずである。Er sprach nie von seinem privaten Leben und hatte wohl *auch* keines. (彼は自分の私生活について話したことは一度もなかったし、たぶん私生活などありもしなかったのだろう)の場合も同断で、彼が私生活のことを口にしなかったことと、私生活をもっていなかったこととの共通性が auch によって示されているのである。もう一つだけ例を挙げよう。Das Sprachlabor wird von unserer Lehrerin fast nie benutzt. – Da wird sie wohl *auch* ihre Gründe haben. (ラボ教室をぼくたちの先生はめったに利用しないんだ—たぶん先生にもそれなりの理由があるのさ)に見られる auch はどうだろうか。この auch も、ラボ教室がめったに利用されないという事実と、先生がそれを利用しないそれなりの理由とのあいだに存在する共通性を示している。助詞「…も」による言い換えにこだわるつもりはまったくないが、「先生にはそれなり

の理由もあるのさ」など、ごく自然な日本語だろう。

それでは本稿で問題にしている決定疑問文での心態詞 *auch* についてはどうであろうか。副詞の *auch* も心態詞の *auch* も、もともとはその根本は一つであり、心態詞としての用法もまた、元来は副詞の *auch* の原義、つまり上に述べた〈他との共通点〉〈他との類似点〉〈他への追加〉等々の原義から導き出されたものにちがいない、と私は想像しているが、その点で示唆に富むと思われるのが、Harald Weinrich が 1993 年に世に問うた „Textgrammatik der deutschen Sprache“⁴⁾ の記述に見られる心態詞 *auch* の次の例文である（同書 847 ページ）。

(1) Wenn ich dir den Videorecorder ausleihe, gehst du dann *auch* vorsichtig damit um? – Ja, bestimmt. (きみにビデオレコーダーを貸してあげたら、慎重に取り扱ってくれるかい?—ああ、もちろんさ)
 Wirst du ihn *auch* nicht weiterverleihen? – Nein, bestimmt nicht.
 (誰かに又貸したりしないよね?—むろんしないさ)

この例文では、(1a) Gehst du dann *auch* vorsichtig damit um? (そのときはそれを慎重に取り扱ってくれるかい?) と (1b) Wirst du ihn *auch* nicht weiterverleihen? (誰かにそれを又貸したりしないよね?) の二つが、本稿で問題にしている *auch* の用例であるが、まず (1a) について dann (その場合に) の内容について注目していただきたい。「きみにテープレコーダーを貸す」という前提に立って、「その場合にはそれを慎重に取り扱うかどうか」を尋ねているのであるから、「他人にテープレコーダーを借りる以上は、当然その扱いも慎重にする」ことを相手に求めているのだと考えれば、現在一般に心態詞と見なされているこの *auch* もまた、副詞 *auch* の原義からそれほど離れているものではないことが理解できる

4) Harald Weinrich: Textgrammatik der deutschen Sprache, Mannheim 1993., (邦訳：脇坂豊編『テキストから見たドイツ文法』, 三修社, 2003)

のではなからうか。

次に用例 (1b) であるが、ここには (1a) の dann に相当する前提部が欠けていると思われるかもしれない。しかし文脈からすれば、(1b) も当然 (1a) の前提をそのまま受け継いでいるわけだから、「他人にビデオレコーダーを借りる以上は、当然それを第三者に又貸ししたりすることもしないだろうね」と念を押しているわけである。

それではほかの用例についても、これを手がかりとして考えてみよう。いずれの場合にも、その発話の文脈や発話場面の状況をよく検討してみれば、心態詞 auch の背後に副詞 auch の原義との繋がりがはっきり読み取れるはずである。たとえば上に挙げた Helbig と Weydt に共通の例文 Hast du *auch* die Hände gewaschen? の場合はどうだろうか。

(2) Hast du *auch* die Hände gewaschen? (手はちゃんと洗ったの?)

かりにこの発話が、夕食の前に母親から子供にむかってなされたものとしておこう。おそらくその母親は、食事の前には手をよく洗いなさいというしつけを、日頃からその子供の対して行っていたはずである。「食事をするからには手も洗うべきだ」という前提があるからこそ、このような発話が可能になるのである。

(3) Hast du *auch* die Telefonrechnung bezahlt?

(電話代の支払いはちゃんと済ませてきた?)

この用例も Weydt の前記の本からの引用だが、たとえば勤め先からの帰り道に銀行に立ち寄って電話代を支払ってくると言ってお出かけの夫が帰宅したさいに、妻がその夫にむかってこのような発話をしたと仮定しよう。そのような前提があればこそこの発話なのであって、夫の出がけの約束に関して「あなたは単にそれを約束しただけでなく、実行もしたのでしょ

うね」との期待を込めた質問なのである。

因みに *Hast du auch die Telefonrechnung bezahlt?* というこの決定疑問文は、文脈次第では「電話代も支払ったのか?」という意味にもなり得ることを指摘しておきたい。「ガス代や電気代だけでなく電話代も」という場合のこの *auch* は、実は心態詞ではなく、厳密に言えば、*die Telefonrechnung* をその作用域 (Skopus) とする焦点化詞 (Fokuspartikel) である (この種の語類は、日本語に関しては最近〈とりたて詞〉と呼ばれることがあるようである)。ついでに言えば、本稿で扱っている心態詞 *auch* の知識がないと、あるいはそれに対する語感が欠けていると、用例 (3) を「電話代も払ってきたの?」などと誤訳してしまう恐れが十分にあるし、事実、そのような誤訳はこれまで無数に繰り返されてきたに違いない。心すべきことである。

もう一つ断っておきたいのは、心態詞の *auch* を上述のように副詞 *auch* の原義から導き出して解釈することができるからといって、それを使っている native speaker の話し手 (ないし書き手) がそのことを一々意識しているわけではけっしてない、ということである。*auch* の場合に限らず、一般に *aber*, *denn*, *doch*, *ja* 等々の心態詞は、いずれも本来その語のもっていた意味がきわめて稀薄になってしまっており、極言すれば心態詞としての文法機能しか残っていないとも言えるのであって、話し手 (ないし書き手) は、原義のことなどまったく意識せずにそれを口にしてにすぎないし、それこそが心態詞の特性とも言えるのである。日本語を例にとれば、私たちが接続助詞「も」の原義などいっさいお構いなしに「あいつにも困ったものだ」とか「きみも酒が強いなあ」などと言っているのと同じことであろう。余談になるが、日本語の達人であるドイツ人が「あいつもばかだなあ」という日本語を、*Er ist auch dumm.* と見事に誤訳したことを思い出す。

それでは最後に、この心態詞 *auch* が特殊な用法ではけっしてなく、ごくふつうに用いられるありふれた使い方であることを知っていただくため

に、筆者がこれまでに蒐集してきた具体例のうちのいくつかを御紹介することにしよう。いずれも 18 世紀から今日までのさまざまな文学作品の中から拾い出したものである。なお決定疑問文は、副文では従属接続詞 *ob* に導入される形をとる (Kommst du mit? → Er fragte mich, *ob* ich mitkomme.) ことをお断りしておきたい。

(4) Er sah ihn aus seinem Stubenfenster vor der Schule stehen, er pffif, und Henrich flog zu ihm.

„Lernst du *auch* brav?“

„Ja, Herr Pastor.“

(Johann Heinrich Jung-Stilling, Henrich Stillings Jugend)

ヘンリヒに対する牧師の「ちゃんとまじめにやっているかい？」という問いに含まれている *auch* については、いまさら説明するまでもないだろう。

(5)

Franz: Aber ist Euch *auch* wohl, Vater? Ihr seht so blaß.

Der alte Moor: Ganz wohl, mein Sohn – was hattest du mir zu sagen?

(Friedrich von Schiller, Die Räuber, 1. Akt, 1. Szene)

これはシラーの『群盗』の冒頭の部分であるが、フランツが父親にむかって Aber ist Euch *auch* wohl, Vater? Ihr seht so blaß. と尋ねる台詞を久保栄は「でも、ほんとうにおよろしいのですか、父上？ お顔の色が、まっ青ですよ。」、そしてそれに対する父親の答え Ganz wohl, mein Sohn – was hattest du mir zu sagen? を「もういいのだとも一何だ、おまえの話とは？」と訳している。さすがは名だたる劇作家、名訳である。

(6) „Du wohntest ja wohl neben der sogenannten Gräfin? Man hörte in dem einen Zimmer, was in dem andern laut gesprochen wurde?“ fragte meine Frau.

„Ja, so war es.“

„Nun, du pflegst in der Regel ziemlich vernehmlich zu reden. Erinnerst du dich nicht, daß du von deinem Geld gesprochen hast?“

„Von meinem Gelde? Ich glaube, ich habe den Kellner gefragt, als ich angekommen war, ob das Schloß der Kommode *auch* fest sei; ich habe mehrere Hunderte darin zu verwahren.“

(Karl Leberecht Immermann, Der Karneval und die Somnambule)

「私」なる人物が給仕に尋ねた言葉を直接説話に戻せば、Ist das Schloß der Kommode *auch* fest? Ich habe mehrere Hunderte darin zu verwahren. ということになるだろう。筆箭の錠前が本来の役目どおりほんとうにしっかりしているかの確認を求めるわけである。

(7) 以下の用例には、紙数の関係もあって一々注釈を加える余裕がないが、精読していただければ、いずれも本論で扱っている *auch* の具体例であることを十分に納得していただけるものと思う。

(7) Drei Tage später tobte ein furchtbarer Sturm. Es war Mitternacht, aber alles im Schlosse außer dem Bett. Der Gutsherr stand am Fenster und sah besorgt ins Dunkle, nach seinen Feldern hinüber. An den Scheiben flogen Blätter und Zweige her; mitunter fuhr ein Ziegel hinab und schmetterte auf das Pflaster des Hofes. „Furchtbares Wetter!“ sagte Herr v. S. Seine Frau sah ängstlich aus. „Ist das Feuer *auch* gewiß gut verwahrt?“ sagte sie; „Gretchen, sieh noch einmal nach, gieß es lieber ganz aus! Kommt, wir wollen das Evangelium Johannis beten.“ [...]

(Annette Freiin von Droste-Hülshoff, Die Judenbuche)

(8) „Nun, Viktor, kannst du die Nacht bei mir bleiben und morgen gehst du hinaus, sobald du nur willst. Ist es *auch* wirklich wahr, daß du gar nicht heiraten willst?“

„Ich will dir nur gestehen,“ antwortete der Angeredete, „daß ich wirklich ganz und gar nicht heiraten werde und daß ich sehr unglücklich bin.“

(Adalbert Stifter, Der Hagestolz, Gegenbild)

(9) „Halt“, unterbrach er sich, „noch eins: ich habe ein Vertrauen zu Ihnen, Herr Baron, wie zu meinem Karl, das versteht sich, aber beantworten Sie mir zuvor diese Frage: Sind Sie *auch* der junge Herr Baron?“

Jetzt konnte Eugen lächeln, er griff in seine Tasche. „Hier ist mein Patent.“

„Ah, viel Ehre!“ entgegnete Sturm, faßte das Papier behutsam und las bedächtig den Namen, dann sah er auf die Züge, die darunter standen, neigte sein Haupt und gab es mit zwei Fingern in großem Respekt zurück.

(Gustav Freytag, Soll und Haben, 4.Buch, 4.Kapitel)

(10) „Aber sind Sie denn *auch* gern hierhergekommen?“ fragte er jetzt.

„Gewiß! Weshalb denn nicht? [...]“

(Theodor Storm, Waldwinkel)

(11) Alle lachten unbändig, und nur Szulski selbst, der auch darin durchaus Anekdoten- und Geschichtenerzähler von Fach war, daß er sich nicht gern unterbrechen ließ, fuhr mit allem erdenklichen Ernste fort: „Und wie mit der Frau, meine Herren, so mit dem Geld. Nur nicht ängstlich; haben muß man’s, aber man muß nicht ewig daran denken. Oft muß ich lachen, wenn ich so sehe, wie der oder jener im Postwagen oder an der Table d’hôte mit einem Male nach seiner Brieftasche faßt, ob er ‘s *auch*

noch hat. Und dann atmet er auf und ist ganz rot geworden. Das ist immer lächerlich und schadet bloß. [...]“

(Theodor Fontane, Unterm Birnbaum, 5.Kapitel)

(12) Also dastehend in weißer Unterhose, in baumwollener Nachtmütze und das eine Bein auf dem Rande des Lagers, empfahl Herr Preiss sich dem allmächtigen Schöpfer Himmels und der Erde, und noch einmal hinaushorchend, ob sich *auch* gar nichts rege da draußen in der revolutionären Außenwelt, taumelte er dann mit einem kühlen Salto mortale in die sanften vaterländischen Kissen. Auf dem Nachttisch aber lagen die zwei türkischen Pistolen, ein Federmesser und drei Dutzend Schwefelhölzer.

(Georg Weerth, Humoristische Skizzen aus dem deutschen Handelsleben, 10.Kapitel)

(13) Er senkte die Steinplatte wieder ein und suchte nach einem sichereren Behälter für seine Geheimnisse. Das Fenster nach der Sackgasse war mit einem Gitter versehen, dessen Stäbe einen Arm durchgreifen ließen. Er öffnete es, faßte hindurch und tastete an der Außenwand herum. Er fand dicht unter dem Sims ein kleines Loch in der Mauer, das schon einmal Fledermäuse bewohnt zu haben schienen. Von unten aus konnte es nicht bemerkt werden, und oben sprang das Gesims darüber vor. Geräuschlos erweiterte er mit seinem Dolch die Öffnung, indem er Mörtel und Steine herausbrach, und war bald so weit gediehen, daß er den breiten Gürtel bequem darin unterbringen konnte. Als er fertig war, stand ihm der kalte Schweiß auf der Stirn. Er fühlte noch einmal nach, ob *auch* nirgend ein Stück Riemen oder eine Schnalle hervorstehe, und schloß dann das Fenster. [...]

(Paul Heyse, Andrea Delfin)

(14) „Dürft Ihr diesem Aufruf *auch* wirklich Vertrauen schenken? Handelt es sich nicht vielleicht um eine Falle, die man Euch stellen will, um Euch hinüberzulocken?“

„Nein! Dieser Nachbar ist treu und aufrichtig wie Gold. [...]“

(Karl May, Weihnacht, 9.Kapitel)

(15) Ein Diener brachte Eis, die Gruppen lösten sich, und Anna stand mit Georg allein am Klavier. Er fragte sie rasch: „Was hat denn das zu bedeuten gehabt?“

„Ja ich weiß nicht,“ erwiderte sie und sah ihn mit großen Augen an.

„Ist dir denn *auch* schon ganz wohl?“

„Aber vollkommen,“ antwortete sie.

„Und ist dir das heute zum erstenmal passiert?“ fragte Georg etwas zögernd.

„Gestern abend zu Haus hab ich was ähnliches gehabt. So eine Art von Ohnmacht. Es hat sogar noch etwas länger gedauert. Während wir noch beim Nachtmahl gegessen sind. Es hat's aber niemand bemerkt.“

„Warum hast du mir denn gar nichts davon gesagt?“

Sie zuckte leicht die Achseln.

(Arthur Schnitzler, Der Weg ins Freie, 4.Kapitel)

4行目の Ist dir denn *auch* schon ganz wohl? を用例 (5) でのフランツの言葉 Aber ist Euch *auch* wohl, Vater? と比べてみていただきたい。両者はまったく同じ用法である。

(16) Sie betastete ihr Haupthaar, das nußbraun und üppig war, ob es denn

auch einigermaßen erträglich oben säße, legte sich endlich wieder in die Kissen zurück, zog die Decke bis an den Hals und wurde nachdenklich.

(Emil Strauß, Vorspiel)

(17) Er fragte, was man da tut, und ich sagte, man muß ihnen eine Blindschleiche in das Bett legen. Wenn sie darauf liegen, ist es kalt, und sie schreien furchtbar. Dann versprechen sie einem, daß sie nicht mehr so gescheit sein wollen.

Arthur sagte, er traut sich nicht, weil er vielleicht Schläge kriegt. Ich sagte aber, wenn man sich vor den Schlägen fürchten möchte, darf man nie keinen Spaß haben, und da hat er mir versprochen, daß er es tun will.

Ich habe mich furchtbar gefreut, weil mir das dicke Mädchen gar nicht gefallen hat und ich dachte, sie wird ihre Augen noch viel stärker aufreißen, wenn sie eine Blindschleiche spürt. Er meinte, ob ich *auch* gewiß eine finde. Ich sagte, daß ich viele kriegen kann, weil ich in der Sägemühle ein Nest weiß.

(Ludwig Thoma, Lausbubengeschichten, Der vornehme Knabe)

(18) „Ach ja. Du bist nach Hause gekommen, wie Frau Konsul Vermühlen wegging. Hast du *auch* anständig begrüßt?“

„Nein, ich habe sie nicht gesehen“, sagte Raffael fest und sah die Eltern nacheinander an. Das war keine Lüge: es war eine Abwehr, und sie kam ihm zu. Eine Frau Konsul Vermühlen hatte er nicht gesehen; und was er gesehen hatte, war seine Sache – oh, nur seine!

(Heinrich Mann, Der Unbekannte, 4.Kapitel)

(19) [...]Das Vermögen also betrug, abgesehen von jedem Grundbesitz, in runder Zahl 750 000 Mark Kurant.

Selbst Thomas war, bei aller Einsicht in den Geschäftsgang von seinem Vater über diese Höhe im unklaren gelassen worden, und während die Konsulin mit ruhiger Diskretion die Zahl entgegennahm, während Tony mit einer allerliebsten und verständnislosen Würde geradeaus blickte und dennoch einen ängstlichen Zweifel aus ihrer Miene nicht verbannen konnte, welcher ausdrückte: Ist das *auch* viel? Sehr viel? Sind wir *auch* reiche Leute?... während Herr Marcus sich langsam und anscheinend zerstreut die Hände rieb und Konsul Kröger sich ersichtlich langweilte, erfüllte ihn selbst diese Zahl, die er aussprach, mit einem nervösen und treibenden Stolz, der sich beinahe wie Unmut ausnahm.

(Thomas Mann, Buddenbrooks, 5. Teil, 1. Kapitel)

Ist das *auch* viel? Sehr viel? Sind wir *auch* reiche Leute? と *auch* が繰り返されるところに注目していただきたい。

(20) Wer kommt herein, gestützt auf zwei Feuerwehrmänner? Eine kleine Alte, ein Mütterchen in zerschlissener Mantille, dasselbe, das in München um ein Haar in die zweite Klasse gestiegen wäre. „Ist dies *auch* wirklich die erste Klasse?“ Und als man es ihr versichert und ihr Platz macht, sinkt sie mit einem „Gottlob!“ auf das Plüschkissen nieder, als ob sie erst jetzt gerettet sei.

(Thomas Mann, Das Eisenbahnunglück)

ここが一等車だと言われてここへ来たのだが、事実もそうなのかとの確認を求める老婆の質問が Ist dies *auch* die erste Klasse? である。

(21) [...] Wußte er denn *auch* alles, was er sagen würde? Eine unbestimmte Angst hing über ihm. Er fühlte sich so verlassen, schwindlig,

wie einer, den man auf einem hohen Turm vergessen hat. Er tastete nach einem Halt. [...]

(Rainer Maria Rilke, König Bohusch)

(22) [...] „Nun also“, sagte Delamarche mit ausgebreiteten Armen, in einem Ton als werfe er dem Polizeimann Mangel an Menschenkenntnis vor und diese seine zwei Worte schienen in die Unbestimmtheit der Aussage Robinsons eine widerspruchslose Klarheit zu bringen.

„Ist das aber *auch* wahr?“ fragte der Polizeimann schon schwächer. „Und wenn es wahr ist, warum gibt der Junge vor entlassen zu sein?“ „Du sollst antworten“, sagte Delamarche [...]

(Franz Kafka, Der Verschollene, 6.Kapitel Der Fall Robinson, Ein Asyl)

(23) „Halt den Jungen“, sagt Lämmchen, und schon hat er ihn. Er geht auf und ab, während die Frau den Tee aufbrüht und kühlt. Der Murkel greift einmal nach dem Gesicht des Vaters, sonst liegt er mäuschenstill.

„Hast du *auch* Zucker drin? Ist der Tee *auch* nicht zu heiß? Laß mich probieren. – Also, dann gib ihm meinethalben.“

Aus dem Teelöffel schluckt der Murkel viele Male, manchmal läuft ein Tropfen vorbei, dann wischt ihn der Vater ernst mit seinem Hemdärmel ab.

„So, jetzt ist es genug“, sagt er. „Er ist ganz ruhig.“

(Hans Fallada, Kleiner Mann – was nun?, 2. Teil, Berlin)

(24) „Nun haben Sie denn *auch* schon ordentlich gefrühstückt?“ fragte der Doktor Köppen, ein richtiger alter Truppenarzt, der auch mich schon verschiedentlich unter den Fingern gehabt hatte, als er ihm die große *B auch* Wunde verband.

„Ja, ja, ein großes Kochgeschirr voll Nudeln“, wimmerte der

Unglückliche, der hier wohl einen Hoffnungsschimmer zu erspähen glaubte.

„Na, sehen Sie wohl“, versuchte ihn Köppen zu trösten, indem er mir mit einer höchst bedenklichen Miene zunickte.

(Ernst Jünger, In Stahlgewittern, Englische Vorstöße)

(25) „[...] Nein, ich bin Wirtschaftsprüfer.“ „Wirtschaftsprüfer?“ fragte ich, und er sagte: „So nennt man es. Einige sagen auch Steuerberater. Es hat mit Zahlen und Geld zu tun. Man sieht in den Büchern der Kaufleute und der Fabriken nach, ob alles richtig eingetragen ist, es darf kein Rechenfehler vorkommen, dafür bin ich angestellt.“ Ich konnte es nicht glauben, und wenn Sie ihn gesehen hätten, würden Sie es auch nicht geglaubt haben. Ich fragte: „Ist es *auch* wahr?“ und er sagte: „Ich habe Visitenkarten von der Firma bei mir, bei der ich angestellt bin. Ich kann Ihnen auch meinen Ausweis zeigen.“ [...]

(Hans Erich Nossack, Das kennt man)

用例 (8) にも Ist es *auch* wirklich wahr, ... という箇所があったし, (32) には Ist das aber *auch* wahr? が, そして (34) にも ob das *auch* wirklich wahr sei が出てくるが, Ist es *auch* wahr? はいわばこの種の *auch* の典型的な使い方とっていいだろう。

なお用例 (25) の 4 行目に ob alles richtig eingetragen ist というくだりがあるが, ここにも *auch* を用いて, ob alles *auch* richtig eingetragen ist としてもすこしもおかしくない。いまさら改めて説明するまでもないだろう。

(26) „Wenn Sie über den Fall reden“, sagte der Wärter, „muß ich den Gefangenen in die Zelle zurückbringen.“

Den Gefangenen, dachte ich und fragte : „Kriegst du *auch* genügend Schlaf, Richard?“

„Jetzt ja.“ Er zögerte. „Zuerst hat mich das Licht gestört. Es ist keine starke Birne, aber sie brennt.“

(Stefan Heym, Mein Richard)

(27) Ich grinste geheimnisvoll. „Kommt näher, dann zeig’ ich euch was.“ Die anderen umringten mich gespannt. Ich schaute mich erst nach dem Gebäude um, ob uns *auch* niemand beobachtete, dann griff ich in die Hosentasche, zog eine rot-weiß getüpfelte Kapsel heraus und hielt sie meinen Freunden unter die Nase.

Dirk sperrte die Augen auf. „Klaus“, stotterte er, „das... das ist doch eine der Kapseln mit MondStaub.“

(Henry Winterfeld, Der Letzte der Sekundaner, 3.Kapitel)

(28) „[...] Aber ich erzähle Dummheiten, und Sie lachen mich aus, nicht wahr?“

„Nein, ich lache nicht.“

„Zwei Jahre lang... langweile ich Sie *auch* nicht?“

„Erzählen Sie nur!“

(Luise Rinser, Daniela)

(29) Der Unteroffizier Lindenberg saß steif auf dem Schemel, den er sich mitgebracht hatte.

„Bitte Herrn Wachtmeister fragen zu dürfen, um welchen Angehörigen meiner Korporalschaft es sich gehandelt hat.“

„Es war der Gefreite Asch, diese Runkelrübe.“

„Herr Wachtmeister irren sich *auch* nicht?“ fragte Lindenberg ungläubig.

Er vermochte das nicht zu fassen. Er kannte Asch. Der war gesund, widerstandsfähig und durchaus normal. Unmöglich zu glauben, daß ausgerechnet Asch ...

(Hans Helmut Kirst, 08/15 in der Kaserne)

(30) Er versuchte, das Gespräch auf ihren Wagen zu lenken. Es passierte jetzt so viele Autodiebstähle. Ob die Garage vor dem Haus *auch* gut verschlossen sei? Ob sie Ersatzschlüssel habe, wenn sie einmal den Zündschlüssel verliere?

(Michael Horbach, Bevor die Nacht begann)

(31) [...] „Hast du die schönen Schuhe gesehen, die mir der Onkel Mamoulian geschenkt hat?“ fragte sie Jakob Steiner, der neben Josephine im Gras saß.

„Ja“, sagte dieser. „Das sind die feinsten Schuhe, die ich jemals gesehen habe.“

„Wirklich?“

„Meine Seel’, die allerfeinsten!“

Ruth drehte sich um sich selbst.

„Oh, Mami, was werden die andern Kinder sagen, wenn sie mich sehen?“

Ein Schatten glitt über ihr Gesicht. „Gehören sie *auch* wirklich mir?“

„Natürlich“, sagte Herr Mamoulian stolz, „wem denn sonst?“

(Johannes Mario Simmel, Das geheime Brot, 4.Kapitel)

用例 (8) (14) (20) (31), また後続の (35) (40) (41) にも見られるように, *auch* *wirklich* はこの関連できわめてしばしば使われる語結合である。

(32) Der Wagen reihte sich ein in den Strom der Autos und fuhr der Weltmetropole entgegen.

Sowtschick guckte mal rechts und mal links aus dem Fenster, daß ihm *auch* nichts entgeht.

(Walter Kempowski, Letzte Grüße, 1. Teil, 5. Kapitel)

(33) „Wie ging es überhaupt gestern im Konservatorium?“

„Es besteht eine Hoffnung. Wenn ich gewählt werde – gewählt würde, müßte ich zu Kissling ziehen.“

„Was? Schon wieder fort?“

„Ich muß üben. Auf einem Flügel üben. Ein Klavier nützt mir nichts.“

„Du willst also wieder fort? Gehst du *auch* gewiß zu Kissling“ Man sagt doch, daß du bei einer – bei einer Person warst!“

„Was heißt da Person! Was heißt da Person“, schrie Roland weiß vor Wut.

[...]

(Guido Bachmann, Gilgamesch, 7. Kapitel)

(34) Wir gingen nach dem Mittagessen ins Ostasiatische Museum. In der obersten Abteilung – ich habe wieder keine Ahnung, was da eigentlich zu sehen war – hielt sich außer uns beiden zunächst niemand auf. Wir umarmten und und setzten uns einfach auf den Boden. „Ob hier *auch* niemand hinkommt?“ fragte ich. „Bestimmt nicht“, sagte Judith. Ich küßte ihren Hals. In diesem Moment erschien am Treppenaufgang eine Dame.

[...]

(Sten Nadolny, Netzkarte, 3. Kapitel)

終始積極的で主導権を握るユーディットという女の子に対して「ほく」なる男の子が他人に見られることを恐れて、「ここまででは誰も来ないよ

ね」と念を押す場面である。

(35) [...] Dann ließ Anita die Champagnerkorken knallen, und Alma holte die Suppe aus der Küche.

Als die Suppe auf die Teller verteilt war und Gudrun ihr obligatorischen: „Ist *auch* wirklich kein Fleisch drin? Ihr wißt, ich bin Vegetarierin!“ losgeworden war, stießen alle mit Champagner an.

(Elke Heidenreich, Silberhochzeit)

(36) Mit leiser, aber entschlossener Stimme erkundigte die Frau sich über die Art der Zubereitung von Schokolade in diesem Lokal, ob *auch* wirklich kein Fertigpulver verwendet würde, sondern nur reine Kakaopulver, denn nur so schmecke ihr die Schokolade.

(Doris Dörrie, Das Reich der Sinne)

(37) Meine Mutter fragte mich, zweimal, ob das *auch* wirklich wahr sei. Ich nickte jedesmal heftig mit dem Kopf. Ja, ganz genauso hatte es sich abgespielt. Meine Mutter glaubte mir nicht und sperrte mich in mein Zimmer, wo ich warten mußte, bis Andreas Lohmeyer und meine Schwester vom Spielen heimkehrten, um meine Aussage zu bestätigen.

(Karen Duve, Strumpfhose)

(38) Ob er sich *auch* alles gut überlegt hat mit der Rückkehr in seine mitteldeutsche Heimat, der Herr Hampel? Ja, das habe er. Sicher? Aber sicher, ja. Und daher gab es für die Beamten nichts weiter zu sagen, der Herr Hempel sei ein freier Bürger in einem freien Land, und nur ein paar Schritte weiter beginnt das Territorium der Deutschen Demokratischen Republik, auf Wiedersehen.

(Michael Kumpfmüller, Hampels Fluchten, 1.Kapitel)

(39) [...] Ich schlenderte die paar Meter hinüber, rückte den Stuhl herum, setzte mich behutsam, als wollte ich testen, ob die dünnen Streben *auch* hielten, schlug die Beine übereinander, sah mich noch mal im Saal um und sagte schließlich beiläufig : [...]

(Jakob Arjouni, Kismet, 7.Kapitel)

(40) *Linke Innentasche*: mein Schlüsselbund. Jedes Mal, wenn ich ihn einstecke, mache ich den Reißverschluss sorgfältig zu. Dann ziehe ich ihn wieder auf, hole den Schlüsselbund raus, um noch mal zu kontrollieren, ob die Tasche *auch* wirklich kein Loch hat, und dann stecke ich die Schlüssel wieder ein und mache den Reißverschluss zu. Ich habe noch nie einen Schlüssel verloren.

(Martina Brandl, Halbnackte Bauarbeiter, 1.Kapitel Sex und Moabit)

(41) Ein paarmal kamen Offiziere herein, um sich zu vergewissern, daß sie *auch* wirklich einen Russen gefangen hatten. Kopfschüttelnd schlossen sie die Tür wieder ab.

(Christian Kracht, 1979, 2.Teil, 10.Kapitel)

例文 (41) について念のために付け加えておきたいが, um sich zu vergewissern, daß sie *auch* wirklich einen Russen gefangen hatten は, これを日本語に直訳すれば, 「彼らがほんとうにロシア人を捕まえたことを確認するために」であって, 副文が従属接続詞 ob ではなく, daß によって導入されている。しかし内容的には um sich zu vergewissern, ob sie *auch* wirklich einen Russen gefangen hatten (彼らがほんとうにロシア人を捕まえたのかどうか確認するために) と大して変わらないわけで, ここ

に使われている *auch* もまた当然のことながら、本稿で扱ってきた心態詞 *auch* であることは言うまでもない。類似の用例を最後にもう一つだけ。

(42) Ich bot Lucynna meinen Arm an – tust du das eigentlich, um mir Halt zu geben, oder suchst du Halt bei mir, fragte sie – und folgte Lara, die immer wieder zu uns zurücklief, um sicherzugehen, dass wir ihr *auch* folgten.

(Peter Schneider, *Skylla*, 2. Buch, 22. Kapitel)

dass にせよ、ob にせよ、dass wir ihr *auch* folgten (われわれが彼女のあとからついてくること) を念のために確認するのか、ob wir ihr *auch* folgten (われわれが彼女のあとからついてくるかどうか) を念のために確認するかだけの違いで、両者の意味内容はほとんど変わらない。

ベルリンを走るバスの降車口に掲げられていた *Haben Sie auch nichts vergessen?* という注意書きについて、この *auch* のニュアンスは日本人には分かりますまいと述べたドイツの日本学者の言葉を枕に書き始めたこの小論にここまで辛抱強く付き合ってくださいました方々は、この *auch* への正しい語感を十分に身につけられたにちがいないと確信しつつ、このへんで筆を擱くことにしたい。

(2004年8月, 2009年8月加筆)

出典著者一覧表

Arjouni, Jakob (1964–)

Bachmann, Guido (1940–2003)

Dörrie, Doris (1955–)

Droste-Hülshoff, Annette Freiin von (1797–1848)

Duve, Karen (1961–)

Fallada, Hans (1893–1947)

Fontane, Theodor (1819–98)

Freytag, Gustav (1816–95)
Heidenreich, Elke (1943–)
Heym, Stefan (1913–2001)
Heyse, Paul (1830–1914)
Horbach, Michael (1924–86)
Immermann, Karl Leberecht (1796–1840)
Jünger, Ernst (1895–1998)
Jung-Stilling, Johann Heinrich (1740–1817)
Kafka, Franz (1883–1924)
Kempowski, Walter (1929–2007)
Kirst, Hans Helmut (1914–89)
Kracht, Christian (1966–)
Kumpfmüller, Michael (1961–)
Mann, Heinrich (1871–1950)
Mann, Thomas (1875–1955)
May, Karl (1842–1912)
Nadolny, Sten (1942–)
Nossack, Hans Erich (1901–77)
Rilke, Rainer Maria (1875–1926)
Rinser, Luise (1911–2002)
Schiller, Friedrich von (1759–1805)
Schneider, Peter (1940–)
Schnitzler, Arthur (1862–1931)
Simmel, Johannes Mario (1923–2009)
Stifter, Adalbert (1805–68)
Storm, Theodor (1817–88)
Strauß, Emil (1866–1960)
Thoma, Ludwig (1867–1921)
Weerdt, Georg (1822–56)
Winterfeld, Henry (1901–90)